

喫茶店のフラスコ



喫茶店のフラスコ

あれは僕がまだ小学生のころだった、家の近所に煉瓦造りの小さな喫茶店ができた。

僕は通学路の途中にあるその喫茶店から流れる静かに響くジャズの音楽と、珈琲の香りに大人への憧れを抱いていた。

蔦の絡み始めたすりガラスの窓からのぞくと、中ではまだ若いマスターがカウンター越しに理科の実験道具のようなフラスコを火にかけていた。

しばらく熱されたフラスコの中では水が沸騰し、吸い上げられるように吹きあがると上にたまった水は透き通るような琥珀色を帯びて再びフラスコに戻った。

溢れ出る芳香は狭い店内を逃れ、窓からのぞきこむ僕の鼻をもくすぐった。

香ばしい香りを胸一杯に吸い込む僕の視線が店内のマスターと絡む。

僕はお店の外で香りを盗んだことが悪いことのような気がして、あわててそこから逃げ出していた。

だけどそれから、僕は香りに誘われ何度もすりガラス越しにその喫茶店を覗いた。そして、そのたびにマスターと目があっては走って逃げることを繰り返した。

そんな懐かしい日々もいつしか忘れ去られた。中学に上り通学路が変わったこともあり、喫茶店を覗きこむことはなくなっていた。

結局一度もその喫茶店を訪れることなく、僕は大人になった。

成長の過程で珈琲の味も覚えたが、チェーンストアの喫茶店で機械的に入れられるドロップ式の珈琲に、子供の頃のあの感動はなかった。

あの装置が『サイフォン』というものだということを知ったのはたまたま目にした雑誌の小さな記事だった。

ドリップ式に比べ珈琲の味を忠実に再現し、瞬間に沸き立つ香りが特徴なのだという。

写真に映し出される実験道具のような変わらぬ姿からも、あの頃の香りが漂ってくるようだ。

何度も引越しを繰り返したため、子供のころを過ごしたあの町には、もう知りあいもない。しかし頭によみがえったあの頃の香りは、僕を二十年ぶりにあの町へと誘った。

あやふやな記憶を頼りに子供の頃を過ごした家を探すが、町並みは変わり果てその街にあのころの面影はない。

仕方ないとあきらめかけた時、僕の鼻は敏感にもあの懐かしい香りを嗅ぎ取った。

新しい立派な住宅に埋もれるように煉瓦造りの喫茶店はあの頃のままひっそりとたたずんでいた。壁を覆い尽くすほどに伸びた蒼い蔦だけが時の移り変わりを僕に伝える。

重いチークの扉をゆっくりと開くと、長年の間にしみ込んだ珈琲の香りが僕を迎えた。

僕は迷い込んだ森の中で妖精に誘われるように、カウンターの席についた。

その向こうでは少しだけ渋みを増した、あの頃と同じマスターがひとつずつ丁寧にカップを磨いていた。

僕は恐る恐る珈琲を注文する。

「かしこまりました」とマスターの低い声が店内に響くジャズに乗って僕の耳に届いた。

カウンターの上ではあの頃と同じ光景が僕の目の前で、今は僕だけのために繰り返される。フラスコの中で沸き立つ透明な水をあの頃のように覗きこみ、その前にいるものだけに聞こえる、珈琲たちの沸き立つ声に耳を傾ける。

フラスコの向こう側に逆さまに写ったマスターは珈琲豆からすべてを溶かし出そうと慌てる水を落ち着かせるように優しくヘラで撫ぜる。とたんに、隠しきれなくなった香りが店の中にあふれかえった。

火が止められ、ショーは終わりを迎える。

琥珀色に姿を変えた聖水は静かにフラスコへと戻っていく。

マスターは慣れた手つきで、くすみ一つなく磨き上げられた真っ白なカップにできたばかりの珈琲をなみなみと注いだ。

感動冷めやらぬ僕の前にカップが置かれる。

まだ熱いカップからは白い湯気が立ち上り僕とマスターの間にあの頃と同じすりガラスをつくった。

僕がふっと一息、湯気を払うとカウンター越しのマスターと視線が絡んだ。

昔を思い出し、気恥ずかしさから目をそらす僕にわずかに微笑んだマスターが静かに口を開く。

「待っていましたよ。やっと飲みに来てくれたんですね」

僕は顔を緩ませ、年甲斐もなく赤く火照った顔を隠すように、いまだ香りを放ち続ける白いカップをゆっくりと傾けた。

END